

【調査概要】 令和7年度慶良間諸島国立公園におけるサンゴ礁モニタリング調査業務

※詳細な調査結果については、慶良間自然保護官事務所にお問合せください。

1) スポットチェック法による広域モニタリング調査

令和7（2025）年は、令和6（2024）年の白化現象に続いて今年度もサンゴの白化が観察されたため、前年よりさらにサンゴ被度が減少した地点もあった。一方、大きな台風の直撃がなかったこともあり被度が増加した地点も見られた。渡嘉敷島の北側や座間味島の北側などサンゴ被度が10%未満となっている地点は、令和6（2024）年の白化現象によるサンゴの大量死が主な原因であり、回復には新たなサンゴの加入と成長を待たねばならず、時間がかかることが予想される。白化の影響の小さかった安室島西の浅瀬（Z-8）などではサンゴ被度は大幅に増加していた。

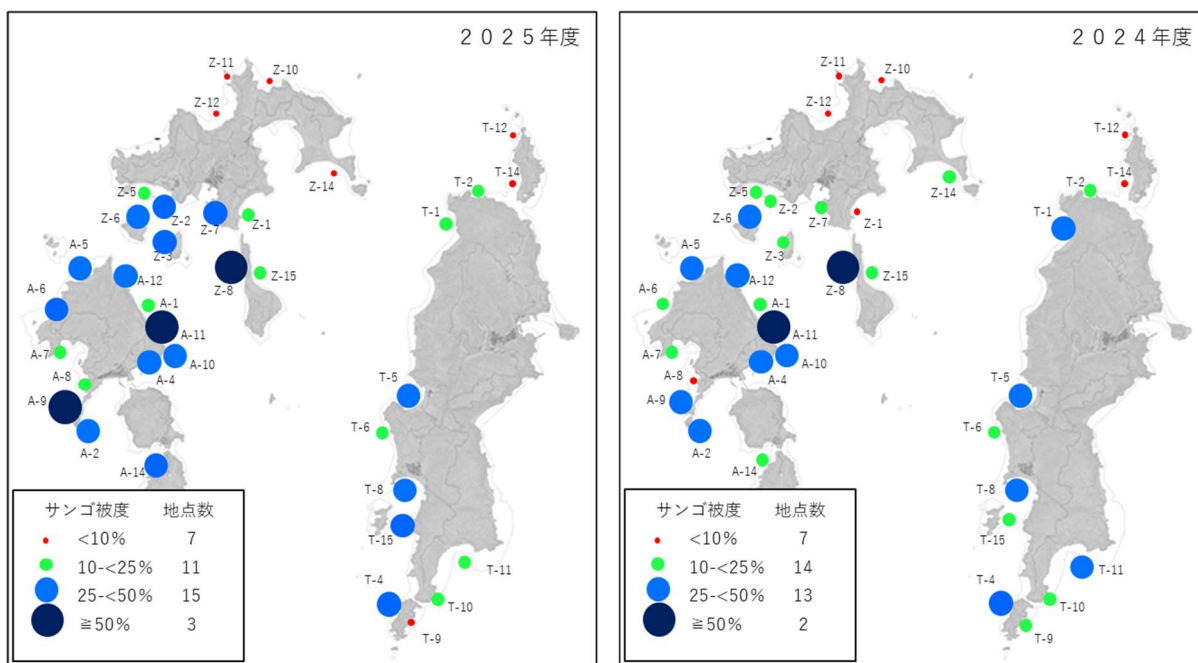


図1 スポットチェック法による各地点のサンゴ被度（右は前年度）



左：2024年の白化でサンゴが激減したチシ（Z-10）



右：健全なサンゴが見られる安室西の浅瀬（Z-8）

2) トランセクト法によるモニタリング調査

各地点のサンゴ被度をカテゴリー分けし、図3に示した。今回の調査では、カテゴリーでは現われていない地点もあるが、タマルル (T-2) のサンゴ被度が前年と同じ値であった以外は被度の増加が見られた。令和6 (2024) 年夏の大規模な白化現象によりサンゴ被度が大きく減少した地点もあるが、多くの地点で回復に向かいつつあることが確認された。

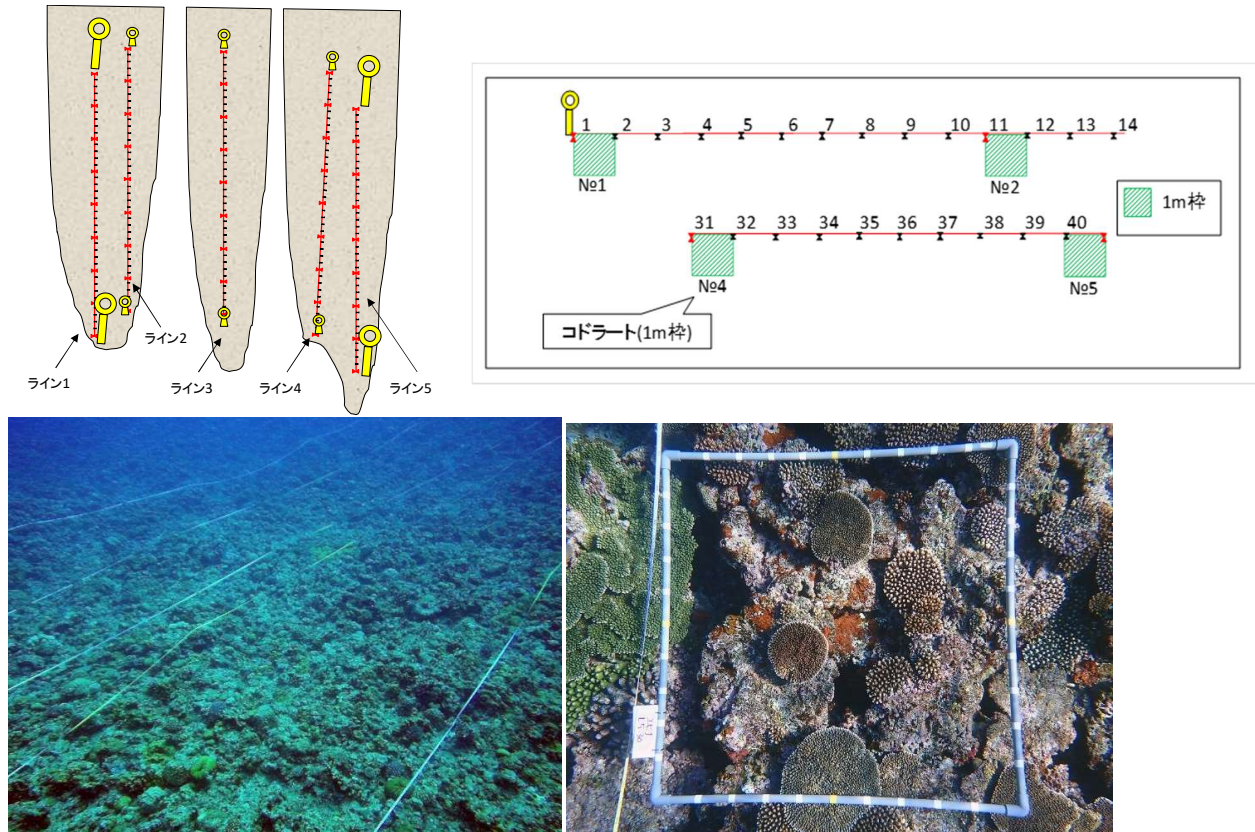


図2 トランセクト調査イメージ

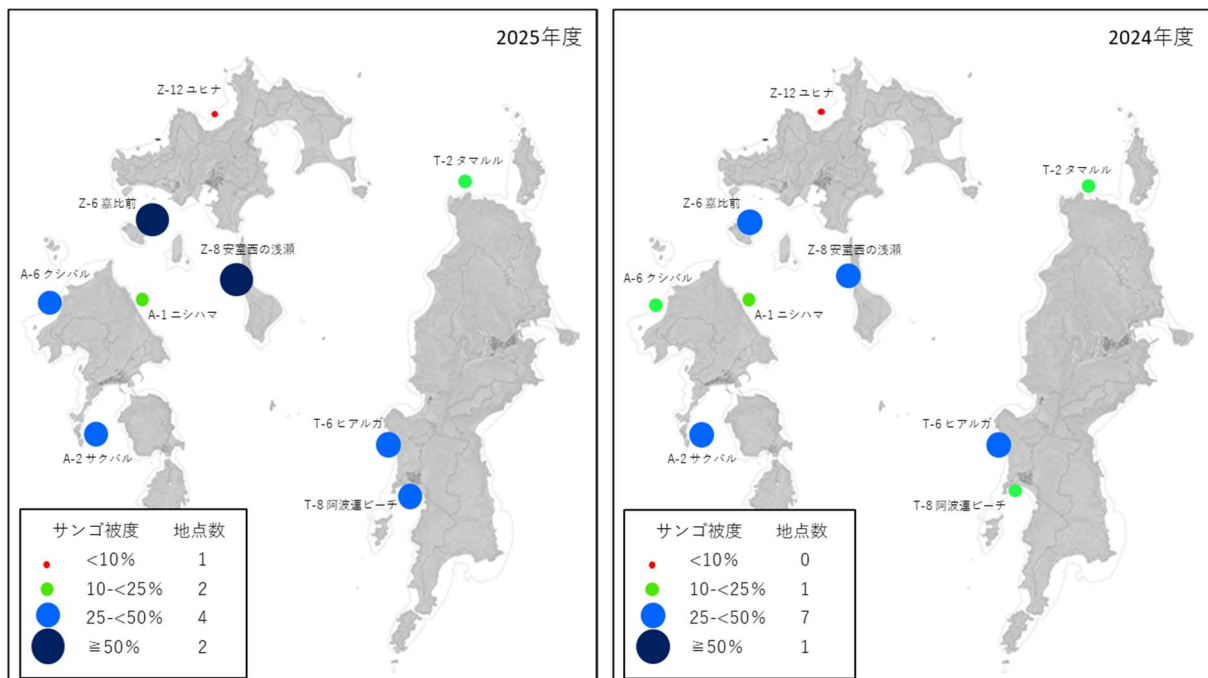


図3 コドラート調査による各地点のサンゴ被度 (右は前年度)

3) 水深 10m 以深の地点におけるトランセクト法によるモニタリング調査

タマルルでは 18.3% のサンゴで白化が観察されたが、安室魚礁とサクバルでは白化は観察されず、サンゴ被度はどの地点も大きな増減はなかった。

4) かく乱要因

【白化】

これまでの高海水温によるサンゴの白化は、7月上旬からサンゴの白化が見られ始め、8月以降も高海水温が続くことで被害が大きくなるというものであった。しかし、令和7（2025）年は8月までは例年と変わらない水温であったが、9月に入って海水温が 30°C を上回るようになったことでサンゴが白化したというこれまであまり経験のないケースであった。広範囲で白化したサンゴが見られたものの、前年の白化に比べるとサンゴの斃死は少なかったようである。

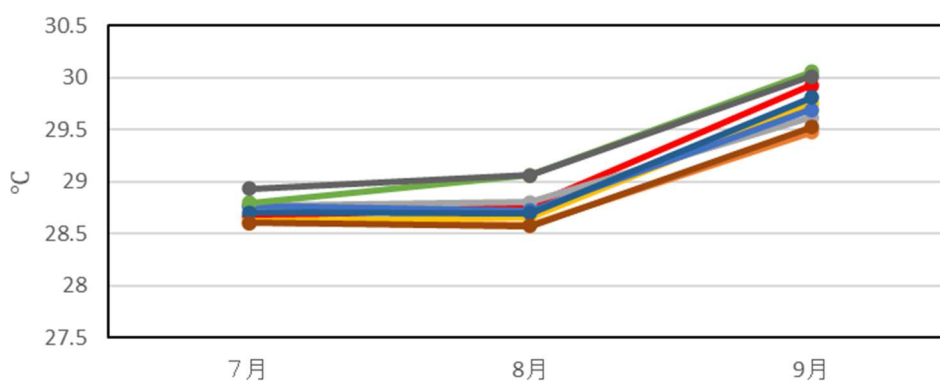


図4 令和7（2025）年7月～9月の平均水温

【オニヒトデ・レイシガイ類による食害】

今回の調査ではオニヒトデは確認されなかった。レイシガイ類については、数個体確認された地点はあるものの食害階級は I（食害部無しまたは食痕がほとんど目立たない）であり、サンゴ群集に大きな影響を及ぼすものではなかった。

【病気】

サンゴの病気に関しては、White Syndrome (WS) が36地点中15地点、Black Band Disease (BBD) が3地点で確認された。どの地点も病気が蔓延するような兆候は見られていない。



図5 ニシハマ南 (A-11) で観察された White Syndrome

【利用による影響】

近年のサンゴ礁保全対策として、ダイビング等でよく利用されるポイントには船の係留ブイが設置されているため、船のアンカリングによるサンゴへの被害はほとんど確認されなかった。また、明らかにダイビングやシュノーケリングの際に損傷したと見られる被害も確認されず、目立った海中ゴミもなかった。